

を前にして誰が正しいものでありえるか、神の偉大さからすれば、ヨブは高慢の罪を犯しているのである。それ故、神のヨブに対する行為は決して不正義ではなく、正しい罰である。しかし、この解釈は正義を未だに人間的な次元で考えているに過ぎない。注意深く見るなら、神の計り知れない偉大さが提示されると同時に、神は善悪の適正な対応関係という正義を遥かに超えてしまっているのである。従って、仮にヨブが本当に義人であったとしても、善悪の彼方にある神に向かって義を訴えても無意味である。

では、ヨブの痛みは如何に癒されるのか。それは、痛みを人間の善悪の次元で捉えるのではなく、善悪を超えた神の全き偉大さのうちに見ることにより、痛みを罰ではなく試練として受容することである。この受容によって痛み自身に意味があり、その先に希望が輝き見えるのではないだろうか。イエスの受難が無意味ではないように。

「障害」のキリスト教的意味

寺戸 淳子

本発表では、一九六〇年代以降のカトリック世界における「知的障害者（と健常者との関係）」をめぐる言説を分析しながら、それらが同時代の社会に対してどのような批判を投げかけ、異なる価値を提示しようとしているのかを考察する。そのために以下の組織・著述家を取り上げる。①一九五〇年代以降

の歴代教皇の発言、特にパウロ六世とヨハネ・パウロ二世の言説、②一九六〇年代からカトリック教会世界で知的障害児をとりまく状況改善の努力を重ねてきた、〈障害がある人々のためのキリスト教事務局〉創設者マリ・エレヌ・マチュー、〈ラルシュ共同体〉創設者ジャン・ヴァニエ、および彼らの活動に影響を与え、あるいはその活動から影響を与えられた聖職者たち、そして比較のために③非欧米世界における障害者の社会的位置づけと彼らを取り巻く価値の世界の人類学的研究、今後の展開の手がかりとして④ジャン・ヴァニエとジュリア・クリステヴァの往復書簡。

教皇メッセージのテーマは、時代と共に変化してきた。二十世紀半ばには、個々人の苦しみがキリストの十字架上の贖いの苦しみに類比され、苦しみを捧げるという意義が述べられていたが、六〇年代には苦しむ人々の社会統合の理想がそれにとって代わり、ヨハネ・パウロ二世のメッセージでは、苦しむ者もつ「他者や社会に呼びかける力」が説かれるようになる。ここでは「苦しみ」が救いへの道を開くという理念が示され、またその語り方には、苦しむことと苦しみに寄り添う行為に言及するとき、個別の事例を出さず、キリストとマリアに代表されるという特徴がある。

これに対し、マチューとヴァニエの言説には、体験談が豊富で固有名詞が頻出するということの他に、以下の特徴がある。まず、「苦しみの聖化」を否定し、苦しみの軽減に向かう行為こそ必要だと説かれるが、その行為が「与える」のではなく「受け取る」ことである点に、「利他性」を核心と捉える議論と

は異なる特徴がある。さらにヴァニエは、「私たちとは違う存在」への恐怖というテーマを展開し、知的な障害のない者たちが、自分とはまったく異なる存在だと思っていた障害のある人たちによって、自分自身の内なる貧しさ・傷つきやすさ・弱さ・傷を暴かれ、それを受け入れ、そのうち他者の傷を受け入れられるようになることで、異なる人々がともに居ようとする「場所」が生まれると述べる。また、障害のある人たちの「貧しさ」が十字架上の受難のキリストの貧しさに類比されるが、その意義は次の二点にまとめられる。第一に、貧しさが「他者によって剥奪された状態」として想起されることで、それが個体の抱える問題ではなく他者との関わりの結果という意味を帯びる。第二に、キリストと結びつくことで、「苦しみ」から「苦しむ者」へ視点が移行し、「苦しみや死がある」のではなく「苦しむ誰かがいる」のだということが明示される。ここから、かの「苦しみや死なのだ」ということが明示される。ここから、キリストやマリアは、「具体的な苦しむ人、亡くなった人」と「その人の傍に寄り添う人」を普遍化する一者として、教皇メッセージに姿を現していたのだと考えられる。これは、「私事」をいかに語り共有するののかという、現在の欧米型社会における問題に通じている。

非欧米社会における障害者の位置づけの人類学的考察は、カトリック世界におけるこれらの言説と「社会的な交流ができる（コミュニティの一員である）ことが個人の能力よりも価値として高い」タイプの社会における言説との類似性を示唆する。またクリステヴァは、フランス啓蒙主義以降の近代社会に

「母（という体験）」の場所がないという視点を持ち込み、知的な障害を「他者性」と結びつける言説に「死」と「母」を加えることで、さらなる展開の可能性をもたらしている。

真宗文化圏域での障害者運動の可能性

—— CILだんないの研究 ——

頼 尊 恒 信

本研究は、「NPO法人CILだんない」（以下、CILだんないと略す）という、真宗文化圏域に存立する障害者自立生活センター（CIL）の思想と地域社会の関係を事例研究として、真宗文化圏域での障害当事者運動の可能性について考察するものである。同法人は、重度障害者四人が中心となり、二〇一一年四月、滋賀県長浜市木之本町地域に自立生活センターを本格的に立ち上げた。同地域の特徴として、木之本町を含む旧伊香郡地域は、真宗寺院が数多く、「講」文化や報恩講などの真宗関連の村行事が根付いており、真宗文化に基づいた村落共同体が形成されている。

CILだんないの自立生活センターは、①農村地帯にある自立生活センター、②仏教に縁深い自立生活センター、③共生生活センターと名のつく自立生活センター、④社会モデルを主軸とした自立生活センター、という、四つの地域特性を生かした特色がある。そのような自立生活センターは、ある意味で真宗文化圏域での自立生活センターのプロトタイプとなり得る。